

第3回
視覚生理学基礎セミナー

OCTでみる 黄斑の形態・微細構造



座長

松本 長太 先生
近畿大学医学部眼科教授



演者

長谷川 泰司 先生
東京女子医科大学

黄斑、特にその中心にある直径 350 μ m の中心窩には光の通過を妨げる網膜内層や網膜血管は存在せず、網膜外層のみが存在している。また中心窩には視細胞が高密度に存在しており、高度な視機能を司るのに適した構造をしている。これまで黄斑の形態や微細構造に関しては組織標本による知見に頼るのみであったが、光干渉断層計 (OCT) の登場・高性能化によって疾患眼での異常所見や経時的な変化に関する新しい知見が次々に報告されるようになり、黄斑疾患の病態理解が深まる一助となっている。正常眼の Ellipsoid zone は中心窩で隆起する形状 (Foveal bulge) を呈しており、疾患眼での Foveal bulge の有無は中心窩視細胞の健全性を規定する重要な所見であることを我々は報告してきた。(Am J Ophthalmol 2014, Retina 2015) 本講演では、高度な視機能を司る光受容体として理にかなった構造をしている黄斑の形成メカニズムについて組織所見と OCT 所見とを対比させながら考えるとともに、疾患眼における黄斑の OCT 所見について多くの画像を提示しながら解説してみたい。

ランチオン
セミナー

日時

2018

2.18

日

12:00 ~ 13:00

会場

大阪医療福祉専門学校

共催

日本視野学会 / アールイーメディカル株式会社